

バトラー先生の思い出

山崎史郎

Shiro Yamasaki

内閣総理大臣秘書官

今、私のオフィスの机の上には、バトラー先生が愛用された小物入れ用の小箱があります。ILCの大道さんのご厚意で、先生の遺品をいただいたものです。

先生に初めてお会いしたのは、1987年で、私はニューヨーク・ジェトロの厚生省代表でした。先生の印象は、最初にお会いした時から今に至るまで、全く変わっていません。いつも笑顔で、相手のどんな話でも真摯に耳を傾け、常に前向きに物事をとらえ、様々な意見をまとめていく。米国、いや世界のリーダーとは、こうした方なのだなあ、とつくづく感じたものです。先生の思い出は尽きませんが、幾つかを紹介いたします。

ニューヨークでは、仕事面は日米の国際長寿社会リーダーシップセンター (ILC) の立ち上げが中心でしたが、帰国の際に、セントラルパーク・ウエストの先生のご自宅に夕食にお招きいただきました。楽しい歓談の後、当時NYで人気が出始めていたカラオケをみんなで楽しみ、先生は、「カラオケは長寿に良いね!」と言われて、本当に楽しそうに随分多くの曲を歌われました。

帰国後も、介護保険やILCのことで、先生と共通の仕事をする事ができ、そうした中で、1998年にザルツブルクセミナーに講師として招待いただいたことは光栄なことでした。このセミナーは、長寿問題について、国際的に著名な研究者が1週間近く合宿してディスカッションをするも

ので、参加メンバーやプログラムは、全てバトラー先生が考案されたものでした。世界中から集まった錚々たる顔ぶれに驚き、先生の人的ネットワークの広さを改めて痛感したものです。セミナーでは、私が丁度日本で検討中だった介護保険構想を紹介し、各国の参加者から大きな関心と賛意を得ましたが、奥様から、「日本の介護保険は、すばらしいと思いますよ。シロウは、NYではjust a young boyだったのが懐かしいわ。」とお褒め(?)の言葉をいただき、少し恩返しができたかなと思いました。先生は、奥様のことを心から愛しておられました。その後日本にいらした時、奥様がコロンビア大学で博士号を取られたことを、「一家にドクターが二人いるというのは、ちょっとしたものだよ!」と本当に嬉しそうにお話しされていたことが忘れられません。

先生に最後にお会いしたのは、3年前の夏のNYでした。ILCのオフィスにお伺いし、いつも通りのお元気なご様子で、これからも永くご活躍されると信じていたのですが、本当に残念です。

僭越な言い方になりますが、私と妻の裕子は、幸福にもバトラー先生、そして奥様のマーナ・ルイスさんに本当に愛していただいたと思っています。もったいないことだと思います。私にとって、バトラー先生は「アメリカの父親」のような方でした。バトラー先生の小箱を見るたびに、つくづくそう思います。



博士(中央)と筆者夫妻